

## 障害児と健常児がともに育ちあう環境とは

### —アサヒ障害児・健常児合同キャンプにおけるグループの発展段階に焦点を当てて—

服 部 次 郎

**要 旨** ノーマライゼーションの思想に基づいて、福祉の世界においては様々な取り組みが行われているが、長い歴史を持つアサヒ障害児・健常児合同キャンプも、この流れに基づいて「障害児と健常児の相互理解と相互扶助」を目指して実施されてきた。筆者も朝日新聞厚生文化事業団の依頼により、これまで二十数年にわたってこの合同キャンプを指導してきた。このキャンプでは、特に障害児と健常児が親元を離れて、グループカウンセラーの指導のもとグループ単位で生活・活動をする中で、障害のあるなしにかかわらず、大きく変化し成長する姿を目の当たりにしてきた。このような体験を重ねる中で、どのような要因がこうした変化を引き起こすのかに関心を持った。今回はこれまで筆者が研究してきたグループの発展段階に言及しつつその要因を整理して、分析し、さらにそれが普遍性を持つものかどうかを関係者、特に保護者の思いを通じて明らかにした。

#### abstract

Based on the idea of normalization, Asahi Integrated Camp of the handicapped and normal children has been held. This camp aims at promoting the mutual understanding and cooperation between the handicapped children and the normal children. The author is interested in the dramatic change and growth of the children who attended this camp. In this paper, therefore, the author analyzes the reason why the children can achieve the remarkable development in the four-day camp.

#### 1 目的

朝日新聞厚生文化事業団主催から、NPO法人主催になって二回目のアサヒ障害児・健常児合同Aキャンプは、岐阜県加子母村の乙女溪谷キャンプ場において、3泊4日という日程で行われた。今年度も昨年度に引き続いて、障害児と健常児が合同でキャンプ生活とさまざまな活動をする場合に、どのような要因が参加児童の成長を促し、また児童グループの発展につながっているのかを明らかにする。二年前筆者の臨床経験を基に提案し、検証を試みた仮説の妥当性を、今年度のキャンプにおいては、特に合同キャンプに児童を参加させた保護者の方々の感想をもとに検証することを研究の目的とした。

なおグループの発展過程を研究する上では、グループ構成メンバーの状況が重要であると以前述べた。今回の合同キャンプでは参加児童35人中、自閉性障害のある児童は7人で、全児童の20%を占め、キャンプ全体にいろいろな意味で影響を与えていた。また障害児の参加は14人で、全児童の40%であった。その中では、先に述べたように自閉性障害がある児童が7人で50%を占め、続いて知的障害児が7人（そのうちダウン症児が3人）でやはり

50%という状況であった。

#### 2 本年度の合同キャンプの概要とその特徴

2008年8月12日（火）から8月15日（金）まで、3泊4日の日程で行われた合同キャンプの参加児童[キャンパー:CA]は昨年度より10人多い35人（7グループ:男子4グループ、女子3グループ）であった。すでに述べたように、障害のある児童[調査表によるもの]は14人、障害のない児童が21人であった。児童の障害別状況では、自閉性障害が7人、知的障害が7人（そのうちダウン症が3人）という状況であった。

この傾向は近年継続しており、今回の合同キャンプでも、自閉性障害のある児童に対して、どのような環境を用意するのか、どう対応するのかが、キャンプでの成果を大きく左右するものと予想された。学年別では、中学生が14人、小学生が21人という状況で、昨年とは逆に、小学生の数が中学生を上回った。一方このキャンプを支えたスタッフは25人（キャンプカウンセラー[CO]21人、看護師1人、事業団職員1人、全体支援担当[カウンセラーOB]1人、助言者1人）という具合であった。今年度は、途中で看護師と全体支援員が交代している。

COは、グループを担当するGC [グループカウンセラー] 7人、キャンプ全体の運営にかかわるPD [パパ] とMD [ママ]、そしていろいろな面でキャンプを支えてくれるMS [マネージングスタッフ] 14人で構成されていた。

開催場所については、昨年同様、岐阜県加子母村の乙女溪谷キャンプ場であった。

スタッフの面では、参加児童が昨年度より10人多くなったため、MSも1人多い14人配置された。今回も事業団職員の補助的役割をする全体支援スタッフ [カウンセラーOB] が配置されている。また、看護師と全体支援員の途中交代も今年度の新しい側面であった。

### 3 本年度合同キャンプの展開とプログラムの特徴

朝日新聞社を大型バスで出発し、昨年同様名古屋高速道から小牧経由で中央自動車道に入り、中津川へと進んで行く。昨年度は、お盆の時期とも重なり途中から渋滞し、自動車道を降りて中津川を目指したが、今年は運行も順調であった。バスの中での行事、いわゆるバスプロ (バス・プログラム) も後で詳しく述べるが、工夫がみられた。恒例の助言者 [筆者] (アドバイザー: AD) のキャンプネーム付けも、バスの中で行われ「カレーうどん」と決った。乙女溪谷キャンプ場にほぼ予定通り入ることができた。

初日の開島式 (開村式) は、外の日差しが強いということがあり室内で行われた。障害児も参加していることを考慮すると、キャンプスタッフのこの臨機応変の対応に最初から感心させられた。

次は、4日間利用させてもらうキャンプ場についての説明、つまり恒例のオリエンテーションがあった。偶然に回った先がそよ風ハウス (食店) であったが、そこで目にした光景はきわめて新鮮であった、長い参加経験の中でも初めての試みだと思われた。そこでは、「紙芝居」を使って食店の利用法について説明していたのである。食店の利用方法についての説明を、「聞くだけでなく見て理解できる」ように工夫していたことは、障害児の多いこのキャンプでの「環境設定」として極めて有効で、とても感心させられた。

今回も朝の集い (集会) では、「青色シート」が地面の上に敷かれ、CAたちが全員その中で説明などを受けた。この「青色の空間」は本キャンプでは既に定着していて、障害児ばかりでなく健常児にとっても「分かりやすい環境」として大いに役立っており、そのシートから出て行くものは4日間を通

してほとんどおらず、きわめて有効であることが今回も確認できた。

次に「一日のスケジュール表」の活用も、継続して行われていた。毎朝の集まりにおいて一日の活動日程を、A3程度の用紙に書き、その用紙をビニールのケースに入れ縦長に並べて提示し説明していた。具体的には、「朝の集い」「食事作り」「グループタイム」「夕食会」「オモローな会 (スタンツ大会=隠し芸大会)」といった具合に、時系列的に上から下へ並べ提示していた。見やすく工夫がこらされており、単に言葉で説明するだけでなく、視覚的にも分かりやすくしていたため、障害のあるCAだけでなく、どのCAにとっても分かりやすく、これもきわめて効果的であった。

合同キャンプの運営において、毎回スタッフをよきもきさせるのが、気象条件である。今年度は、初日、三日目の行事の際に雨が降り、プログラムを運営するスタッフを悩ませたが、スタッフの事前の準備が十分になされていたことと、適切な判断と臨機応変の対応によって、必要な変更も加えながらそれぞれの行事を無事行なった。それにしても自然現象というのは、我々の力の及ばない所にあることを再認識させられた。日本の各地で起きている局地的豪雨などは、その一例であろう。そう考えるならば、我々は、常日頃から自然現象をきちんと観察する目を養い、あるがままに受け止めつつ、どうすれば安全を守れるかを第一に考え、工夫をこらしていくことが大切であると感じる。つまり、自然現象については、人間の予想をはるかに超えた動きをする可能性があることを前提として、我々は人命を第一に考え、無理をしないことが重要といえるのではないか。これはキャンプにおいてだけのことではなく、普段の生活においても心すべきことである。実際、日常の様々な自然現象をみて判断するとき、どれだけ科学が進んでも、それですべてが分かるわけではないというのが本当のところではないか。その点からすると、我々は自分たちに備わっている「五感」にさらに磨きをかけて、すぐ科学の力に頼るばかりでなく、自分の内なる第六感を働かせて判断する力も培うことが大切で、この合同キャンプでは、この点でもキャンパーが学ぶことは多いといえる。実際保護者の感想の中にもこのことが述べられているが、その内容は極めて興味深いものであった。

一日目の内容で注目されたのは、バスの中での対応であった。これはバスプロ (バスの中でのプログラム) といわれている。今回担当したスタッフの個

性、準備・工夫の具合が大きく影響していたと思われるが、とても盛り上がったものとなった。特に感心したことは、キャンプ場で待っていてくれるMSについて、おもしろおかしく紹介してくれたことである。これからお世話になる学生スタッフへの親しみがわき、まだ緊張と不安が強く残っているCAにとっては、それを和らげてくれる、とても有意義な時間になったといえる。一方、初日の大切な行事であるキャンプファイヤーは、雨のため延期となったが、翌日の夕方に実施することができた。日の暮れていく広場での営みは、時間とともに、次第に闇の中へ溶け込む一方で、燃え上がるまきの炎によって盛り上がった。この雰囲気は、CAたちの心をときほぐすと同時にグループの一体感を生み出す上できわめて有効であった。今回も各グループで一緒にすわられるスペースが敷物によってしっかりと確保されていたため、グループ全員でそろってすわる姿があり、グループの凝集性を高めることに役立っていたようである。「分かりやすい環境」という点からも、またグループの凝集性を高める点からも評価できる。この時間中に何らかの理由でグループから離れて、MSと別の場所にいたCAは一人だけであったと思われるが、このようなCAに対しても、無理にグループに参加させようとせず、このCAの気持ちや動きを尊重しながら、集団的な行事を進めるという対応の仕方が、このCAは勿論のこと、この様子を見ているすべてのCAにとって、合同キャンプは「安心できる空間を保障してくれる」という信頼感を感じさせ、このキャンプに魅力を持たせるひとつの要因ともなっている。またキャンプファイヤー終了前のトワリングは見事であり、今年度のテーマである「とも(友)」という文字を暗い空間に浮かび上がらせ、ファイヤーをしめくくったことも見事な演出であり、今回の合同キャンプで大切にしたいと考えていたテーマが、CA一人ひとりのところに自然に刻み込まれていったように感じる。

二日目は、なんといっても「川遊び」ができるかどうかCAにとっても、グループ活動の展開にとっても大きな影響を与える。川遊びは、合同キャンプの行事の中では最も自由度が高く、開放感をもたらすプログラムである。天候も回復し、CAたちは好天のもと十分に水の感触を楽しんだり、水を通しての遊びや関わりを楽しんだりしているようにみえた。川での飛び込み、いかだ遊び、水鉄砲遊びなどを通じて障害児も含めてCAの一人ひとりが、楽しみ方のスタイルは別として、川遊びに参加出来て

いたようにみえる。また、GCに水をかけたり、さらに川へ突き落としたりという「いたずら」が許されるという伝統も、ややもすると危険なことは禁止されることの多い現代においては貴重な体験といえる。特に、学校などで「良い子」といわれ、自分の子どもらしい欲求を抑えてしまっているCAにとっては、こころの底から開放されるひと時といえてよい。GCたちも、このあたりはよく承知しており、子ども時代に帰って楽しんでいてくれた。この姿は、子どもが将来、自分もカウンセラーになりたいと思わせる一因になっているといえよう。合同キャンプの趣旨からいって、皆が一か所に集い、それぞれの楽しみ方ができることは素晴らしいことで、ある意味で最も「自然な」光景のひとつであった。川遊びは、素朴な内容の遊びであるが故に、多くのCAがいろいろな形で楽しめる魅力的なプログラムであることを再認識させられた。しかし、その一方で、川遊びは危険と隣り合わせにもなっており、開放感が高まっている時にこそ「細心の注意」を払わなければならない。その点で、水に入っている時間を決め、見守りのスタッフも配置して万全の注意を払っていたことは評価できる。ただし細かいことをいえば、川に入る、出ることを合図する役割のスタッフが集団のいちばん端の方で、合図の鈴を鳴らしていたため、その反対のふちにいたCAにそれが伝わっていない場面が見られ、少し気になった。集団全体の中央で鈴を鳴らすなり、反対のふちにいたスタッフももっと声をあげるとよかったと思われる。もうひとつ気になったことはキャンプ場から川までの道におけるCAに対する声かけである。キャンプ場に向かうバスの中での注意では、「キャンプ場から川まで5分以上は、車の通る道を歩かなければならないため、歩く時は山際を歩くように」と説明していた。それにもかかわらず、筆者のついていったグループでは、MSが付き添っているながら、川際を歩くCAに声かけをしていなかった。何はともあれ、安全にだけは細心の注意を払ってもらいたいと考える。以前から指摘しているように、「どんなに良い企画も、ひとつの事故で終わりになる」ことを、具体的な場面において、一人ひとりのスタッフが再認識することが必要である。

三日目は、お寿司の太巻き作りによるスクランブルパーティである。これも今回新たに工夫された形式の食事会である。前回までは、伝統的に、スタッフが食事を準備してくれる夕食会が行われていた。この食事会の時だけは、CAも準備なしに食事が

楽しめるという「ありがたい」企画であった。この企画のよかった点は夕食会後キャンプでの最大イベントであるスタンツ大会（隠し芸のグループ別発表会）が予定されているため、その大会でどのような発表をするかについて、考え、準備する時間が取れるというところにあった。そのようなわけで、今年は発表の準備は大丈夫かと個人的には心配していたが、ふたをあけてみると、そのような心配も吹き飛び、とても盛り上がりのあるものとなった。CAたちだけで考えた出し物が多く、またほとんどのCAが何らかの形で出し物に参加して大会を盛り上げてくれていた。今年も昨年の経験を活かし、発表を始める前に、どのグループが発表するか、内容はどのようなものか、を紹介するための歌を用意し、しかもその歌が「対話形式」になっているという気の利いたものであった。観客と発表するグループをさえぎるカーテンも用意しており、グループの準備する場面を隠してくれたおかげで、何が発表されるのだろうかと見る側もドキドキして発表を待つこととなり効果満点であった。また各グループのスタンツの内容も、きわめて子どもらしいもので、みるからにCAたちがあれこれと知恵をめぐらせ工夫した感じがよく出ていた。ここで「活躍の場」を持ったCAは「満足感」と同時に、大きな「自信」を得たのではないかと思われる。一人ひとりの児童に「活躍の場」を提供することこそ、現代社会において忘れられがちになっている面であり、それをこのキャンプが保障していることは高く評価でき、参加児童に人気のある一因ともいえよう。その一方でこの集団的な行事に乗り切れず、MSの個別対応を長時間必要としていたCAも一人、二人見られ、課題も残していた。この原因のひとつとして、スタンツ大会の運営をグループに任せすぎ、その結果、時間的に長くなったり、内容的にクイズなど言葉でのやり取りが多くなったりして、視覚的・動作的に楽しめる要素が減少し、児童によっては興味を持てなかったことがあったと思われる。この点について一言いうならば、グループの主体性を尊重しながらも、事前に、この企画の責任者が各グループに割り当てる時間や、その内容について、皆が楽しめるものかどうか、検討しておくべきであったと考える。

四日目（最終日）も、順調に「閉島式（閉村式）」を迎えることができた。昨年同様、今回でこのキャンプを卒業するCAのために、あいさつの時間を設けていたが、これは、とても配慮のある対応に思われた。一人ひとりのCAがここに残るメッセージ

を残してくれた。キャンプスタッフによる、このような小さな「思いやり」はいつまでもCAのここに残るもので、本当に大切であると感じた。同時に、多くのCAたちが、必ず言ってくれる『楽しかった』『ありがとう』という言葉を書く事ができ、あらためて合同キャンプの意義を感じる事ができた。

帰りのバスの運行も順調で、「終わりよければすべてよし」の言葉通り、とても充実した気分です予定通り新聞社に戻ることができた。最後に感心したことは、前回のレポートにおいて「バスの中でCAがキャンプに関する感想を述べる時間が設けられていなかったことが残念」とコメントしておいたところ、今回はきちんと感想を述べる時間を設けていた点である。しかもそれを歌で表現させるという工夫をされており、今回の合同キャンプのスタッフの質の高さとしっかりとした準備に、つくづく感心させられた。

#### 4 本年度合同キャンプの成果と考察

ここで今回の合同キャンプ4日間を振り返ってみて、キャンプの目的を達成するために大切と思われた点をあげて、キャンプの成果とそれに対する考察をしておきたい。

まず、この合同キャンプの最大の目的は、いうまでもなく障害のある児童とない児童が、生活を共にする中で、『相互理解・相互扶助』を図っていくことである。と同時に、それを試みる中で、『人が人を育てる』、つまり、人が変化し成長していく上で大きな影響を与えているものは、何よりもいっしょに生活している『人』であることが明らかになったことが成果といえる。その意味で、キャンプファイヤーで浮かび上がった『とも（友）』という文字は、この合同キャンプのテーマを象徴するものであったといえる。

「人が人を育てる」「人が人の成長を助ける」という観点から、今回のキャンプの成果をまとめてみる。その点で、まず指摘しておきたいことは、それぞれのGCが自身の個性、考え方の違いは持ちながらも、一人でグループをまとめていこうとするよりはCAやスタッフと共にいろいろな工夫をして、一人ひとりのキャンパーの成長を願いつつ、グループをまとめ、発展させようとしていたことで、この点を高く評価しておきたい。

具体的には、

- ①CAのニーズを出来るだけ早く把握し、一人ひとりのCAのために「安心できる、分かりやすい環境」と「活躍できる場」を設定したこと

②自然現象や環境の変化にも対応できる方策を事前に十分検討し、準備しておくことで、どのような状況になっても、楽しめる時間と機会を保障し、CA同士が出来るだけ早く打ちとけるようにしたこと

③ GCだけでグループの成長・発展を図るのではなく、グループのCA一人ひとりを大切にすることで、CAたちが成長し、サブリーダー的存在も育っていくようにしたこと（このことがグループの成長を助けると同時にグループの凝集性を高めていた）

④長年の伝統を大切にする一方で、GCだけがグループの責任を取るのではなく、キャンプのMSなどスタッフと協力・連携しつつ、グループの成長・発展を図ったこと

という4点をあげておく。

次に、それぞれについて、より詳しく説明し考察を加えたい。

①については、事前にCAのニーズをきめ細かく調査し、分かりやすく記録していたことである。

これは、とても大切なことで、ケースワークという調査にあたる。グループ全員の顔写真を1枚の紙に印刷したもの、さらに配慮の必要性が高い障害のある児童についての「障害児メモ」が用意されていた。また今年初めて目にした「サポートブック」にはグループ全員の顔写真がのせてあり一人ひとりの特徴も書かれてあった。筆者のように短い期間の中で、できるだけ多くのCAを把握しようとするものにとっては、すばらしい参考資料となった。これらの資料は、一人ひとり異なった特性を持つCAのために「安心できる環境」を用意し、「活躍できる場」を設定する上で、大いに役立っており、保護者の感想の中にも読み取れる。これは後で詳しく述べる予定であるが、障害のあるCAにも取り組みやすい環境を与えてくれたため、出来ないと思っていたことが出来た、などと述べられている。

②に関しては、とてもきめ細かい内容のマニュアルが用意されていた。

これを読むと、特に変化しやすい山の天候を考慮していろいろな場面を想定した準備が進められていると感じ取ることができた。まさに「備えあれば憂いなし」であるが、それでも判断の難しい場面があり、自然を相手とするキャンプ活動においては、決して油断をしてはいけないことを再認識させられたところである。それにしても、

今回の合同キャンプのスタッフは臨機応変の対応に優れ、雨の場合にも適切に対応し、事故もなく、CAたちが楽しめるよう工夫していた。これも事前のきめ細かい準備と、それをマニュアル化したおかげと思われる。

③は以前から何度も繰り返しコメントしてきたことである。

GC一人でできることは限られているという現実の中で、自分が担当するグループのCAの成長を助けるようこころがけるとともに、CAの中に、よきリーダー的存在を見出し、育てていくように配慮することもGCの大切な役割であるといえる。その意味で、最終日、今年でキャンパーとしての参加が最後であるというCAが、自分はまた3年経ったらこのキャンプに戻ってきたい（つまり、大学生になったらキャンプカウンセラーとして戻ってきたい、という意味であるが）といった感想を述べてくれたことは、この合同キャンプにおいて「人が人を育てている」ことの何よりの証拠といえるのである。

④については、合同キャンプのよき伝統（自炊を基本とするキャンプ）を大切にする一方で、グループについてGCだけが責任を取るという、従来の考え方に縛られず、CAが楽しめるためにはどうするのがよいかを第一に考え、キャンプの運営面やCAへの対応において、スタッフ間でとてもよい協力・連携が図られていたことは大きな進歩と感じられた。この背景には、きめ細かい「情報共有」により「児童に関する共通理解」があったことが大きな要因としてあったといえる。一昔前のGCの中には、グループは自分で責任を持ちたいので、余計なことはしないしてほしい、という考え方を強く主張するものもいたため、情報の共有が不十分な面もみられた。これは心情的には理解できるものである。しかし忘れていけないことは、何よりもキャンプに参加しているCAたちが、「参加してよかった」と感じ、そして親の方々も「参加させてよかった」と思っただけの対応はどういうものであるかを考えることである。これは、ケースワークやグループワークをするときの、基本的留意事項に通ずるものといえる。

さて、このような様々の工夫等により、この合同キャンプに関係したものはどのような成果を得ることができたであろうか。

関係したものには、

①キャンプの主役であったキャンパー

②キャンパーを参加させてくださった保護者の方々

③キャンプの運営に関わったスタッフ  
など、が含まれる。

合同キャンプの成果を確認するには、いろいろな方法があると思われるが、今回は関係したものの声に耳を傾けるという方法を選択した。

具体的には、保護者の声を中心に取り上げることとした。

しかし、参考のために昨年度の報告において紹介したCAたちの声も取り上げて、GCたちの工夫・努力の結果として生み出された成果を再度確認しておく。

(キャンパーからの感想)

[2007年研究レポートからの引用]

『今回記録を活用させてもらったグループの5人のCAが、その後、キャンプについてどのような感想を述べていたかを知るために、「思い出を書こう」という寄せ書きをのぞいてみた。とても驚いたことは、述べられた思いに大きな共通性が見られたことである。CAの感想を引用してみると、

中3 (絵がかかっている)

[軽度知的障害児](D子)

中2 いろんな事ができて、すごく楽しかったよ!! ありがとう。(B子)

中1 みんなありがとう。(C子)

小6 たのしかったよ..たくさん遊んでくれて、どうもありがとう。またいきたいよ。

[軽度知的障害児](E子)

小6 4日間ホントありがとう。夏休みの中で一番たのしかったです。来年も行きたい。

(A子)

といった具合である。

キーワードは、「楽しかった」と「ありがとう」という言葉である。これら二つの言葉は、合同キャンプの本質をしっかりと捉えており、ある意味で、キャンプの全参加者にとって最高の贈り物となるような言葉であると筆者には聞こえるのである。

合同キャンプでは、やはり「楽しい活動」であることが大切であると同時に「感謝の気持ちをあらわしたくなる出会い」があることが、キャンパーをはじめとして、いろいろな人のところを揺さぶるものであり、それが素晴らしい企画であるといわれる由縁であると考えられる。』

このように、CAの生の声を聞いてみると、この合同キャンプがいかに大きな影響をCAたちに及ぼ

しているか、その成果をうかがい知ることができる。

さて、今回は、アフターキャンプでの保護者交流会において保護者の生の声を聞く事が出来たため、それらを紹介することで、キャンプの成果を確認することとする。これまでも述べてきたように、キャンプに子どもさんを送ってくださる保護者の方々の思いはキャンプの成果を確認する意味でもきわめて重要であり、この合同キャンプをさらに発展させていく上で、忘れてはならないものである。

(保護者交流会で聞かれた保護者の感想)

(1) 兄(中1:健常児)は4年間続けて参加している。夏が近づくと合同キャンプはどうしても行きたいとってくる。キャンプの申し込みはまだかなーと寄ってくる。反抗期にはいつているが、この時期だけは親に寄ってきてくれるのでうれしい。日常的には障害のある子と近づく機会がない。初め子どもをキャンプに出すのは不安だったが、「毎年毎年、キャンプに行きたいということは、この合同キャンプでよい体験をしているからだと思っている。」

(2) 合同キャンプから帰ってきた瞬間の子ども(小4:健常児)の顔を見て、「鍛えられてきたような顔」になっていた。去年はまき割り専門だったようだが、今年は料理もやったことで家でも料理を作るようになった。「キャンプのあとは、3日間ぐらいはスクランブルエッグを食べさせられた。カウンセラーの方たちの様子に大きな影響をうけているようで、自分も大学に行ったら、同じようなことがしたいと今年も言っていた。」

(3) 弟(小3:健常児)は来年も行けると言っ  
てほっとしていた。姉(小6:健常児)は中心になりたがる子。「学校では、いろいろと言うだけで、あとのことが出来なかったりしたが、キャンプ後はみんなのことを待てるようになった、と先生に言われた。」いろいろなキャンプに行ったが、2人とも時間に追われることが多い他のキャンプに比べて、合同キャンプではのんびりできたと言っていた。次の日から、2人とも歌を歌いまくっていた。何曲あるかと思うくらいであった。スタッフの方々には本当に感謝している。

(4) 兄がダウン症の障害をもっていることもあり、本兄(中3:健常児)に接するのは二次という面もあった。合同キャンプには、小

3から参加させてもらっている。学校では、自信がなくて大きな声で騒いだりもしない。教室では人と関わらないようにしているところもあった。でも「合同キャンプでは、人と関わる楽しさをおしえてもらった」ようで、ビデオで見せてもらったように大声で歌っていた。「最近、やる事がグループカウンセラーに似てきた。学校のキャンプでも活躍したようである。合同キャンプで教えてもらったことで、自信がついてきた。担任の先生にも、人のことがみえるようになった」といわれた。

(5) 本人(小4:広汎性発達障害・軽度)「とにかく楽しかった」ようである。キャンプ(8月実施)のあった翌月は、ずっと何かをするたびにキャンプの話が出ていた。キャンプ用に文集はすごく長い時間をかけて、楽しかったことをいっぱい書いていた。できないこともいっぱいあったが、みんなと一緒に楽しく過ごすことが大好きである。「はしゃぐところを抑えつけるのではなく、うまくグループの中に入れてくれ、同じ活動をさせてもらったことが親としてありがたい。プレキャンプもアフターキャンプもあって、きめ細かい対応が出来ていると思う。原則、全部自炊がというのも驚いたが、子どもの話を聞いていると、自炊の意味はとても大きい」と思った。包丁の持ち方もキャンプに行く前と全然ちがっていた。

(6) キャンプに参加できると決まってから、子ども(小3:ダウン症・中度)を誰も知らないところに出すことに気づき、心配になったが、これからはそういう機会もふえるので、コミュニケーションの仕方を身につけてほしいと思っている。「これまで、学校のキャンプでは、いつもバスでは先生の隣にすわっていた。しかし、この合同キャンプでは、仲間の輪の中に入って楽しそうにしていた。」家に帰ってきてからも、人に何かを伝えようとする姿勢がみえるようになった。こちらの指示も入るようになってきた。以前は注意などすると、ごまかすようなところがあったが、今は『はい』と返事もしてくれる。また、「天候を気にするようになった。雲を見て、雨が降りそうだと傘を持っていくといったように、天候を察する姿勢も見られるようになり、

大きな成長と考えている。」

(7) 本人(中2:自閉性障害・軽度)は4年間参加させてもらっている。最初の頃は緊張していたが、だんだんに行くことが楽しみになってきた。「普段は苦手だからと言って、親もやらないと決めつけてしまっていたが、やり方がわかればできるのだということが親にもわかってきた。合同キャンプに行きだしてから、自分でできることはやろうとしてくれるようになった。」「本人は、人とのコミュニケーションがうまくいかないが、合同キャンプの中では、ありのままの自分を出しても許される雰囲気があるので、本人も救われるのだと思う。」この合同キャンプで夏を過ごさないと夏をこせないという生活スタイルになっている。このキャンプの準備は大変なことだとわかるので、カウンセラーの皆さんには感謝の気持ちで一杯である。

以上のような交流会で出された保護者の感想を、先に述べた「人が人の成長を助ける」という観点から整理しながら、成果を裏付ける資料として紹介し、考察を進めたい。

感想(2)(小4/健常児の保護者)カウンセラーの方たちの様子に大きな影響をうけているようで、自分も大学に行ったら、同じようなことがしたいと今年も言っていた。

感想(4)(中3/健常児の保護者)最近、やる事がグループカウンセラーに似てきた。学校のキャンプでも活躍したようである。

(考察)これらの感想は、キャンパーがグループカウンセラーから大きな影響を受けつつ成長し、同時にグループカウンセラーを自分の心の中へ「よき指導者のお手本」として取り込みつつあることを裏付けているといえる。さらに自分が将来の目標とするものとして、カウンセラーがあるということも素晴らしく、合同キャンプにおいて「人が人を育てている」ことの何よりの証明になるといえよう。

次に、合同キャンプでの様々なプログラムや人との関わりを通じて育ったと思われる点に関係すると思われる報告として、次の感想をあげておきたい。

感想(3)(小6/健常児の保護者)中心になりたがる子。「学校では、いろいろと言うだけで、あとのことが出来なかつたりしたが、キャンプ後はみんなのことを待てるようになった」と

先生に言われた。

感想(4) (中3 / 健常児の保護者) 合同キャンプで教えてもらったことで、「自信がついてきた」。担任の先生にも、「人のことがみえるようになった」といわれた。

(考察) この二つの感想は、GCがグループのCA一人ひとりを大切にする中で、CAたちが集団生活における様々な活動を通じてお互いに影響を与えつつ成長していったことを示しているといえる。具体的には、「思いやりのところ」が芽生えたり、自分に対する「自信」が生まれてきたりしていることを示すものといえよう。

さらに合同キャンプでは、障害児に対する「きめ細かい対応」、「ありのままの自分を出せる雰囲気」「仲間の輪の中に入っているのが当たり前」といった雰囲気が伝統的に受け継がれ、大切にされていることがキャンパーにも伝わり、成果に結びついていると思われる感想もみられる。

感想(5) (小4 / 広汎性発達障害・軽度の保護者) [子どもが] はしゃぐところを抑えつけるのではなく、うまくグループの中に入れてくれ、同じ活動をさせてもらえたことが親としてありがたい。プレキャンプもアフターキャンプもあって、「きめ細かい対応が出来ている」と思う。

感想(6) (小3 / ダウン症:軽度の保護者) これまで、学校のキャンプでは、いつもバスでは先生の隣にすわっていた。しかし、「この合同キャンプでは、仲間の輪の中に入って楽しそうにしていた。」「家に帰ってきてからも、人に何かを伝えようとする姿勢がみえるようになった。こちらの指示も入るようになってきた。」

感想(7) (中2 / 自閉性障害・軽度の保護者) 普段は苦手だからと言って、親もやらないと決めつけてしまっていたが、「やり方がわかればできるのだということが親にもわかってきた。」「合同キャンプに行きだしてから、自分のできることはやろうとしてくれるようになった。」本人は、人とのコミュニケーションがうまくいかないが、「合同キャンプの中では、ありのままの自分を出しても許される雰囲気があるので、本人も救われる」のだと思う。

(考察) 上の感想は、先に説明した、「CAのニーズを出来るだけ早く把握し、CAが『安心できる、分かりやすい環境』と、『活躍できる場』

を設定していたこと」や「自然現象や環境の変化にも対応できるような方策を事前に十分検討し、準備しておくことで、どのような状況になっても、楽しめる時間と機会を保障し、CA同士が出来るだけ早く打ちとけるようにしたこと」という合同キャンプの特色により、具体的には出来ないと思っていたことが出来るようになったり、自分のことは自分でやろうといった具合に意欲的になったりと、障害のあるCAたちの成長に大きな影響を及ぼしていることの証拠といえる。

そして何よりも、キャンパーを引き付けていたものは、昨年度のキャンパーの声にもあった「楽しい」「ありがとう」に象徴されていた内容であるが、より具体的なことは、以下の感想にも感じ取れるのである。

感想(1) (中1 / 健常児の保護者) 毎年毎年、キャンプに行きたいということは、「この合同キャンプでよい体験をしている」からだと思っている」

感想(2) (小4 / 健常児の保護者) 合同キャンプから帰ってきた瞬間の子どもの顔を見て、「鍛えられてきたような顔」になっていた。昨年はまき割り専門だったようだが、今年は料理もやったことで家でも料理を作るようになった。「キャンプのあとは、3日間ぐらいはスクランブルエッグを食べさせられた。カウンセラーの方たちの様子に大きな影響をうけているようで、自分も大学に行ったら、同じようなことがしたいと今年も言っていた。」

感想(6) (小3 / 障害児の保護者) 「天候を気にするようになった。雲を見て、雨が降りそうだと傘を持っていくといったように、天候を察する姿勢も見られるようになり、大きな成長と考えている。」

感想(8) ((小4 / 障害児の保護者) 原則、全部自炊がというのも驚いたが、「子どもの話を聞いていると自炊の意味はとて大きい」と思った。包丁の持ち方もキャンプに行く前と全然ちがっていた。

(考察) 合同キャンプでの体験が、楽しい体験ばかりでなく、厳しさやいろいろと大変な場面を体験することも含んでいることが、キャンパーたちのたくましさを育てているといえる。原則自炊という厳しい内容や、急に天候



が荒れたりするという条件も含むキャンプであるからこそ、キャンパーにとっては予測のできない、冒険的な要素を含む、きわめて魅力的なキャンプとなっているといえよう。

以上のような成果を生み出してきた合同キャンプであるが、最後に、この三泊四日の合同キャンプが持っている基本的構造を分析し、このような成果を生み出す過程を児童グループの発達段階という観点から整理・検討し考察を加えて、本論文を終えることとする。

これまで述べてきたことを整理するためにも、合同キャンプの特色を児童グループの発達段階という観点から検討を加えた。二年前、筆者は過去二十数年に及ぶ臨床経験から、障害児と健常児で構成される児童グループの発達段階に関する試案を提案し、検証する目的で、「四段階説（これまでの臨床経験に基づく仮説）」を紹介した。

具体的には、第一に「個別ニーズの把握とその充足」の段階、第二に「信頼関係の成立と自己表現の芽生え」の段階、第三に、「興味・関心の共有化とグループ意識の芽生え」の段階、第四に、「グループ意識の育成と活躍の場の保障」の段階、というものであった。

しかし昨年、あるひとつのグループ（健常児3人、軽度知的障害児2人）の動きを追いながら、児童が成長し、グループが発展していく過程を、GCの発言や記録を参考にしながら可能な限り客観的に検討した結果、これまでの筆者の仮説の有効性は概ね検証できたが、各段階の名称については、働きかける側（GC）からの表現と働きかけられる側（CA）からの表現が混在していた部分もみられて、分かりづらい点があることが判明した。そのため、より混乱が少なく一貫性のある表現に変更したところである。つまり、CAの主体的変容を重視した表現を用いる一方で、それを可能にするGCの働きかけを（ ）で表すことで、より実践的で、利用しやすい考え方にしたのである。

具体的には、昨年度の文献を参照いただきたい。今年度については、今回の実践をもとに、さらに分かりやすくするため、字句等に若干修正を加えた。以下、それによって説明をしていく。第一段階は「個別ニーズが理解され、充足されることによる居場所（安心感）獲得の段階」（GCの対応は「（キャンパーの）個別ニーズの把握とその充足に努める段階」とした。

第二段階は「他者（カウンセラーおよびキャン

パー）への信頼感獲得に基づき、自分の内面にある様々な気持ちを自己表現する段階」（GCの対応は「キャンパーとの信頼関係を築きつつ自己表現を促進する段階」と記述する。

第三段階は「興味・関心の共有化とグループ意識高まりの段階」（GCの対応は「興味・関心の共有化支援と適切な見守りの段階」と表現したい。

最後の第四段階は「活躍の場などを体験することによるグループ意識の高まりと思いやりの段階」（GCの対応は「活躍の場などを保障することによるグループ意識育成への配慮段階」と表現する。

ここで、CAの主体的変容を重視した表現に基づいてグループの発達段階を簡潔にまとめてみるならば、第一段階は「個別ニーズが理解され、充足されることによる居場所（安心感）獲得の段階」、第二段階は「他者（カウンセラーおよびキャンパー）への信頼感獲得に基づき、自分の内面にある様々な気持ちを自己表現する段階」、第三段階は「興味・関心の共有化とグループ意識高まりの段階」であり、最後の第四段階は「活躍の場などを体験することによるグループ意識の高まりと思いやりの段階」となる。

また、これを支える環境要因として、第一段階では「キャンプファイヤー」、第二段階では「川遊び」、第三段階では「スタンプ大会（今年は、「オモロいな会」と呼ばれた会）」が設定されているということが、三泊四日という短期間での合同キャンプでは大きな意味をもっていることが明らかになった。さらにキャンプ全体を通じて大切にしてきた「自炊」も、ある意味で「活躍の場」を作り出し、大きな「自信」をCAたちに、特に合同キャンプ体験を重ねているCAたちに与えているのも確かであり、これが先に述べた『楽しさ』『感謝したくなる体験』などとともに、合同キャンプへの参加動機をさらに高めることにつながっているといえる。

今後は、この「四段階説（これまでの臨床経験に基づく仮説）」の有効性をさらに検証していくために、合同キャンプにおいて実際にキャンパーたちと生活を共にしているグループカウンセラーたちの見方・感じ方も考慮する必要があると考えている。

今回は、それらのうちのいくつかを紹介するにとどめておきたい。

ある男子グループの4日間の動きをそのグループのGCの表現を借りて紹介しておく。

1日目：「不安・様子見の時期」で、CA同士の会話が少なく、自分本位の行動が目立ってい

た。

2日目：「グループを意識する時期」で、グループの他のCAを気にかけるようになった。

3日目：「はじける時期」で、自分の好きなことに熱中し、笑顔が多く見られた。

4日目：「協力・思いやりの時期」で、協力してマットを運んだり、タープを片付けたり、協力する姿、行動が遅いCAを待つ姿、など思いやる場面が見られた。

と報告してくれている。

もう一つの女子グループのGCは、

1日目：「(家族と離れて4日間を過ごさなければならぬ)緊張・興奮・不安の中で、グループの他のCAの観察をしていた時期」で、自分が他のCAにどのように関わっていくべきか考えていた。

2日目：「いろいろと話し合う時期」で、一緒に行動している中で、自然と会話が発生して、自分自身についていろいろと話し出していた。

3日目：「自分をより表現する時期」で、理解できた相手とさらに深い関係を作ろうとする反面で、自分に合わない相手にはあまり話しかけないところがみられた。

4日目：「共に過ごした仲間と別れたくない時期」とまとめている。

このように、GCのころには、「不安と緊張の時期」で始まった合同キャンプが、「協力と思いやりの時期」・「仲間と離れたくない時期」にまで発展していったと映っているようであった。

今後は、さらに多くのGCの報告を収集し、筆者の「四段階説(これまでの臨床経験に基づく仮説)」の有効性を検証していきたいと考える。

最後になったが、今回三泊四日の合同Aキャンプを無事終えることができたのは、毎年工夫をこらしキャンプ事業の改善に努め、キャンプの継続に努力されてきたNPO法人アサヒキャンプの中久木氏、長年この企画を暖かく見守りかつ支援してくださっている朝日新聞厚生文化事業団、そして素晴らしい工夫ときめ細かい配慮をしてくれたキャンプのパパとママ、さらにグループのキャンパーと生活を共にして最後まで頑張ってくれたグループカウンセラー、若さと連携プレーを武器に必要なときには様々な支援をして舞台裏を支えてくれた多くのカウンセラーの皆さんと看護師さんに感謝したい。そし

て何よりも、このキャンプが行えるのは子どもさんたちを参加させてくださった保護者の方々のおかげであることを述べさせていただくと共に、合同キャンプの主役としてドラマを盛り上げてくれたキャンパーの皆さんにここからお礼を申し上げたい。

{注} 個人情報保護のため、GC等の記録の内容は、一部変更しています。

#### [参考・引用文献]

(1) 服部次郎「2005年度アサヒ障害児・健全児合同キャンプに思う」(研究レポート)

2005年 朝日新聞厚生文化事業団

(2) 服部次郎「2006年度アサヒ障害児・健全児合同キャンプに思う」(研究レポート)

2006年 朝日新聞厚生文化事業団

(3) 服部次郎「2007年度アサヒ障害児・健全児合同キャンプに思う」(研究レポート)

2007年 NPO法人アサヒキャンプ名古屋